

# 徹底的行動主義に基づく八正道の再構築

—その者の営みにおける「正しさ」を考える—

Noble Eightfold Path on radical behaviorism

○渡辺 修宏<sup>1</sup>・小幡 知史<sup>2</sup>

Watanabe Nobuhiro, Obata Satoshi

国際医療福祉大学<sup>1</sup>, 障害児通所支援事業所樹の子クラブ<sup>2</sup>

International University of Health and Welfare, KINOKO Club

Key words: Noble Eightfold Path, radical behaviorism, rightness

## 目的

仏教の開祖である釈迦による最初の説法（初轉法輪）で示された教えの1つは、八正道と言われている。八正道は、仏教における実践行（いわゆる修行）を指し、正見、正思（正思惟）、正語、正業、正命、正精進、正念、正定によって構成される（Table.1）。

八正道は、涅槃（悟り）に至ることを目指す実践であるが、必ずしも仏教に帰依する者のためだけの営みではない。時に仏教が宗教ではなく実践哲学や科学と呼ばれるように、仏の教えとの縁がない者、つまり万人に対する、十分有意義な知識や技術になり得る。すなわち、多くの方々の人生の歩み方への活用が期待されるといえる。しかしその一方、やはり仏道に慣れ親しむ者でないと、八正道の理解と実践は難しく、その抽象さによって混乱を招くことが少なくない。また、八正道は実践である以上、宗教的理解のみに留まることなく、人の具体的な行動として捉える必要がある。そこで本研究は、八正道を、具体的な日常生活における行動レベルに分析することを試みる。

## 方法

本研究は、八正道を日常生活における営み（行動）として捉えるために、科学的枠組みから行動の予測と制御を得意とする行動分析学と、その哲学的基盤である徹底的行動主義の視点を活用する。

## 結果と考察

行動分析学および徹底的行動主義は、形而上学的概念を放棄し、具体的な事象の生起/低減/消滅を追求しながらそれを明らかにするために、生体の反応（行動）と行動の相互作用に注目する。すなわち、具体的な行動の直前の環境と、その行動そのもの、そして、その行動が生起した直後の環境変化の3つの事象を時系列かつ一体的に捉え、行動の予測と制御に挑戦する。したがって、その予測と制御を支える関数的事実（科学的真実）が、この理論及び哲学の「正しさ」と言えよう。

この考え方に基づいて八正道を分析するならば、正見は、その者がその時に認識の対象とする環境なり事態を、主観や客観に振り回れず、まさに現象として「正しく」、その時空間的変化を捉えることであるといえよう。正思は、正見で捉えたその変化を受け入れ、それに対応することであるといえよう。正語は、正見ないし正思も、あるいはいづれをも適切に描写（主に言語化）することであろう。正業は、正見、正思、正語を踏まえて、その者の生の営みに必要としない（過不足しない）殺生や奪取を生起させず、その者の生の営みを維持させる行為を繰り返すことであろう。正命と正精進は、その者の生涯を通じて正業を全うすることであろう。そして正念と正定は、その者がその時に、その者を取り巻く全ての環境に「正しく」注意を向けることであろう（Table.1）。

以上の内容を鑑みるならば、ここで重要となるのは、八正道が終始繰り返す、「正しさ」とは何かということである。その「正しさ」は誰にとつてのそれなのか、また、いつの時点、どの範囲で判断されることなのか、そして、その「正しさ」の根拠はどのように説明されるのかを明らかにしなければ、人の日常生活における八正道を具体的な営みとして捉えるのは困難である。

誰にとつての正しさか、という問いの答えが、その行為者（その者）であるとするならば、その時点で正見が成立しなくなる可能性がある。正見が「その者」の主観を必ずしも重視しないためである。また、「その者」と相対する者や、「その者」を取り巻く人々（地域や社会）が答えであっても同じ問題は生じる。しかし、上で述べた者以外の、何か超越的な存在を答えとするならば、それこそある種の宗教内でしか成り立たなくなる。従って、この間に対する適切な解答は、「その者」が営む世界（環境）であると筆者は考える。つまり、常に変化し続ける環境が、その様相を変えつつも環境が環境として存続（持続）されるために必要不可欠な諸条件<sup>1)</sup>、それが、「正しさ」なのである。この諸条件とは、徹底的行動主義における文化的随伴性も含む概念であろう。

次に、この正しさはいつの時点で、どの範囲で判断されるのかという問題だが、そもそも時間的・空間的に限定しようとする自体が誤りかもしれない。ただ、その者（人間）が捉えられる時空間的範囲にはある程度限界があるので、その範囲内で、「その者」が居る環境の持続可能性を保持するために、短中長期的視点に分析することは可能であろう。付け加えて、その意味においてなら、正しさの根拠を言及できるかもしれない。

いずれにせよ、八正道は、「その者」の生活や人生が営まれる場所、地域、社会、文化圏域、あるいは星体や宇宙において、つまり、それらの環境（規模や次元は複数あるが、全てつながっている。従って、環境は1つ：一体である）が存続されるようにしかるべき行為を実践することであろう。自身の幸福や命のための営みに留まらず（勿論それら自体も重要なのだが）、その生もしかるべき時期に消失することを当然たり前とすることである。

Table.1 八正道の教えと、徹底的行動主義に基づくその捉え方

|     | 八正道の教え                     | 徹底的行動主義に基づく捉え方  |
|-----|----------------------------|---|
| 正見  | 正しく無常を捉えること。               | その者がその時に認識する環境や事態を、主観や客観に振り回れず、まさに現象として「正しく」、その時空間的変化を捉えること |
| 正思  | 妄語を離れ、正しく考えて判断すること         | 正見で捉えたその変化を受け入れ、対応すること                                      |
| 正語  | 綺語・離間語・粗悪語を離れ、正しい言葉を用いること  | 正見ないし正思も、あるいはいづれをも適切に描写すること                                 |
| 正業  | 殺生や盗みを離れ、非梵行を離れて正しい行為をすること | その者の生の営みに必要としない殺生や奪取を生起させず、その者の生の営みを維持させる行為を繰り返すこと          |
| 正命  | 仕事に勤しみ生活を営むこと              | その者の生涯を通じて正業を全うすること   |
| 正精進 | 鋭意努力を継続すること                |   |
| 正念  | 今の状態に正しく注意を向けること           | その者がその時に、その者を取り巻く全ての環境に「正しく」注意を向けること                        |
| 正定  | 何かに惑わされることなく集中すること         |   |